

22 長崎は今日も雨だった

星野博美

長崎からいずみさんが上京したので、品川で会った。

彼女は長崎のテレビ局で働く同い年のディレクターで、知り合ってかれこれ七年になる。ここ数年、私も長崎に出かける機会が多かったので、年に数回、東京か長崎で会う間柄だ。

彼女は最近、徒歩で通勤できる便利な場所に新築マンションを購入し

た。「大ニュースがあるんです！」とメールを送ってきたので、「いよいよ結婚か！」と返信すると、「あ、それだけはない」との返事。いやいや、自力でマンション購入はさらにすごいと思う。ありがたいことに、長崎に来たらいつでも泊まっていい、と言ってくれる。

会うなり「マンションの住み心地はどう？」と尋ねた。「それが、聞いてくださいよ！」と彼女の話が始まった。

ある日、彼女が疲れ果てて帰宅し、風呂も入らずふとんに直行すると、何かの電気製品が稼働するジージーという音が暗闇から聞こえた。起きだして部屋じゅうを確認するが、何も消し忘れてはいない。ふとんに入る。ジージー。また起きる。何もない。ジージー。

不思議な気持ちのままトイレに行ったら、温水洗浄機付きトイレのノ

ズルがジーコジーコと、出たり入ったりを繰り返していた。

おまえか、犯人は！　彼女は電源を引き抜いた。しかし温水洗浄機付きトイレは、電源を切ると水を流すことすらできない、実は不便な代物なのだ。仕方なく電源を入れなおし、再びジーコジーコ。その晩は眠った。

翌朝、忙しい彼女はバタバタと出勤した。トイレのふたを開けたまま。帰宅すると、トイレの周りが水浸しになっていた。昨晚まではただのイン&アウトだったノズルが、いよいよ勝手に噴射を始めたのだった。「知ってた？　あの噴射、すごい勢いなんですよ。ふだんは上に尻があるから気がつかないだけで。かなりの距離まで飛ぶの」

興奮のあまり椅子から立ち上がり、尻を指しながら話してくれる。

新築マンションなのに！ 頭にきた彼女は翌日、管理会社に苦情を入れた。しかし担当者は「いちいち住民のトイレまでは責任を負えない」「お宅の使い方が不適切だったのでは？」とのらりくらり責任をかわそうとする。苛立ちながらも、用をたしては水を流して電源を切る、という使い方をして切り抜けるしかなかった。

数日後。管理会社から彼女に電話があった。先日の居丈高な調子から、一転して平身低頭になっていた。マンション全戸の温水洗浄機付きトイレを取り換えることになった、という。

「トイレが勝手に噴射するという苦情が、マンションじゅうから殺到した、っていうんです。驚いちゃった」

その様子を想像した。長崎市内の繁華な場所にある瀟洒なマンション。

住民の目を盗み、すべての部屋でトイレが勝手な行動を取り始める。まるで、マンション全体が何者かの意思に乗っ取られたようではないか。

「ところが、話はまだ終わらないの」

彼女は勝手に働くトイレの顛末を、職場でSさんという先輩の女性プロデューサーに語って聞かせた。例の調子で、身ぶり手ぶりを交えながら。Sさんも私はよく知っている人で、働く女性の鑑みたいな、面倒見のよい頼れる姉御だ。すると大笑いするどころか、こう言ったそうさ。

「え、あなたのところもなの？」

なんと、Sさんが買ったマンションでも造反が起きていたのだ。しかし反旗を翻したのはトイレではなく、風呂。風呂の湯沸かし器に内蔵された女性の声が、「お風呂が沸きました」と一晩じゅう語り始めたのだ。

という。

「それが、まさにうちのトイレがおかしくなった晩からなの」

トイレの話で爆笑していた私は、一転、青ざめた。

場所が問題なのだ。

Sさんが住むマンションは、西坂の二十六聖人記念館のはす向かいにある。彼女もまた親切に「いつでも泊まってい」と言ってくれ、「いや、さすがに西坂は恐れ多いので……」と口ごもったことを覚えている。

西坂——。それは豊臣秀吉の命で磔にされた二十六聖人の処刑地。その二十六名のみならず、中浦ジュリアンやカルロ・スピノラ、ハシント・オルファネール、キリシタンの母として誉れ高かった推定八十歳のルシア・デ・フレイタスも、ここで処刑された。キリシタンの処刑地と

して最も悪名高かったが故に、聖地に転じた場所、それが西坂なのである。

ほんの四百年前、このあたり一帯はキリシタンの中心地だったところなのだ。長崎にあった教会のほとんどは、宣教師たちが国外追放された直後、一六一四年十一月に破壊された。

今年は、なぜだかキリシタンの話題が多い。小石川の切支丹屋敷跡から発掘された人骨がシドッチのものだと特定されたり、長崎のサント・ドミンゴ教会跡近くのマンシヨン建設現場から人骨が発掘され、キリシタンではないかと騒がれたり。今年は徳川家康の死から四百年の節目にあたる。キリシタンの魂が何かを訴えているのではないかと、常々思っていた。

「星野さん、キリシタンの呪い、とかって考えたでしょ」

「考えた」

「私も、ちよつと思つた。で、調べてみたんですよ」

テレビディレクターの本領発揮で、彼女は気になったことを調べずにはいられなかった。そして一つ判明したことがあつた。

トイレが造反したその晩。長崎市内は尋常ならざる豪雨に見舞われた。「長崎は今日も雨だった」という名曲があるように、長崎は雨の多い街だ。しかも坂が多いので、その夜は市内のあちこちで浸水被害が出た。そしてこのエリアに雷が落ちた。どうもその雷が、様々な電気器具の基板を狂わせたのではないか、というのが彼女の推論だった。

「なるほどね……」と言いながらも、私の視線は宙を泳いだ。確かに

雷は落ちたかもしれないし、基板にわるさをしたかもしれない。しかし、よりによって長崎市内にたった二人しかいない友達のマンションで、同時に不思議な現象が起きた説明にはならない。第一、雷の意味をどう理解する？

「全然信じてないでしょ」

「信じるよ。でも、納得はいつてない」

長崎はやっぱり不思議なことが起きる街だね、という結論に、無理矢理おとしこむしかなかった。